
エルデグランデ物語

控え室

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エルデグランデ物語

【Nコード】

N6118V

【作者名】

控え室

【あらすじ】

能力者、魔道士、神器使いと三種類の異能力者が存在する荒廃した異世界エルデグランデ。この世界を舞台に、能力者の久我響（主人公）とその相棒、神器使いのアスカを主軸として物語は進みます。謎の本“白書”求めて旅をする二人。果たしてこの先何が巻き起こるのか？

続きは一週間以内には出したいと思っています。延びても二週間以内には。早め早めに出せるようがんばって行きますのでどうぞよろしく願います。

第1話：禁書庫侵入大作戦！

「これも違う。これも……違つ。ちつ、はくじ“白書”のはの字も出てきやしない」

俺は本を元の場所に戻す。

さつきからこの作業の繰り返しだ。

やーっぱこんなふつつーの図書館にあるわけないんだよなあ。

「おい、アスカ。そっちあつたかー？」

少し離れたところで同じように本を探している相棒に声をかける。

「ねえよ。どれも普通の魔道書だ」

………そっけない。

うーん。

奥の棚にもないんじゃないかもつこの本はだいたい見つくしちゃつたよなあ。

「わかつちやいたけどここもハズレかね………ん？」

ふとカウンターの方を見る。

司書のおねえさんが偉そうなおっさんを図書館の奥へと案内して行くところだった。

そのまま扉の奥へ消えていく。

あのおっさん、格好からして貴族かな。

なんかごてごてしてた。

「そっいえば………」

横合いから話が出る。

気づくとアスカも俺と同じ方を向いていた。

「聞いた話によると」

しかしまあ。

ほんと………見れば見るほど美人だなこいつは。

目はきりつとしていて勝気な印象。綺麗な空色の髪を後ろで無造

作にくくっついて、全体的にどことなく荒っぽさがあって………

なんか王宮の文官から閲覧許可をもらわないといけないらしい。

「じゃあ禁書庫はこの国の貴族ぐらいしか見られないってわけだ」

「だろーな」

アスカに相槌を打つ。

そもそも一般市民じゃ王宮に入れてくれんしな。

「そういうことらしいからさアスカ」

「あ？」

それならそれで仕方がない。

やるべきことはひとつ！

「忍びこむぞ」

「……………まじ？」

まじ。

「ハイ夜になりましたっ！！！！！！！！！！」

俺たちは閉館後の図書館前にいた。

「別に言わなかったってわかってるっての……………まじでやんのか？」

「つたりまえだろ。 “白書” がどこにあるかわからない以上、手がかりは全部あたっていかねえと」

「でも国の禁書庫なんだろ。セキュリティも結構厳しいんじゃないか？」

「たかだか本に、そこまで厳重なセキュリティはかけないだろ」

「そうか？」

たぶんな。

「とりあえず中にはいるうでだ。」

そおは言ったもの……………。

「どうやって侵入しようかね？」

正面の扉は閉まっていた。無理やり入ろうとすれば警報が鳴るだろうし……。

「困った。窓は全部はめごろしだったしなー」

ぐるっとひと回りしてみたが侵入できそうな場所はなかった。

「うーん。」

「どうしよう？」

「おいヒビキ」

「ん？」

「なんでか知らないけどこのドア開いてるぞ？」

「まじ？」

アスカに言われて確認する。

見落としていたようだが裏口があったらしい。

ドアノブを捻ってみると確かに開いた。

「………なんで？」

アスカと顔を見合わせる。

「さあ？」

無用心だなオイ。

扉を開けて中に入ると小部屋に出た。

月明かりのおかげで中の様子がなんとなく見える。

部屋には机がいくつか置いてあった。

事務室のようなところだろう。

さらに小部屋を抜けるとカウンターの裏に出た。

「真っ暗だな。アスカ、昼間のおっさんが入った部屋ってどっ

ちだっけ？」

「左。奥の部屋だったと思うぞ？」

アスカに言われて左へ行ってみる。

『Staff Only』と書かれた木の扉があった。

「ここか」

ノブをひねる。が、開かない。

「あれ？鍵かかってら」

「おいヒビキそこ、パネルがあるぞ？」

「え？」

アスカが言うとおり、扉の横にはロックの解除用っぽいパネルがあった。

零から九までの数字が書かれたボタンとカードキーの溝みたいなものを取り付けられている。

なるほど。

電子ロックね。

.....

やべ。

「おいアスカ、カードキー」

「ねえよ」

.....

「パスナンバーいくつ？」

「知らねえよ」

.....じゃあ。

「どうやって開けんの？」

「知るか馬鹿ッ！！！そもそもなんであたしがカードキー持つてると思った！！パスナンバー知ってると思った！！？」

「じゃあどうやって開けんのっ！！！！？」

「くり返すな！知らねえよッ！！！！！！」

詰んじやったじゃないか。

扉を軽く叩いてみる。

がんがん。

意外に厚そうな音だった。

「うーん、このくらいならぶち破るのは簡単なんだけど.....」

「そんなことしたら警報なるわな」

そうなんだよなー。

どうしよう、ほんとに困った。

と、俺がどうするか考え始めた時だった。

………がちゃ。

「ふえ？」

扉が開いた。

それも………。

内側から。

「誰だ！先程から騒々しいぞ！！」

中からひげ面のおっさんが怒鳴りながら出てきた。

「つかこのおっさん、昼間の貴族っぽいおっさんじゃねえか。」

「ああ、このおじさんがまだ居たから裏口開いてたのか」

アスカが呟く。

「な、なんだ貴様ら！どこから入った！！」

俺たちを見たおっさんは狼狽しながらも叫んだ。

「お、おいどーすんだよヒビキ！見つかったぞ！？」

「ふんっ！」

どすっ！！！！

テンパったアスカがこっちを見るのと同時、俺の拳がおっさんの腹部にきまつた。

おっさんは声もなく口から泡を吹いて沈んでいった。

「よしおっけー」

「少しくらい容赦してやれよ………」

アスカが呆れて俺を見てくる。

まあ、見つかった以上は仕方ないじゃん？………ねえ？

ちゃんと加減はしたし。

おっさんの脇には本が一冊落ちていた。

俺はそれを手に取る。

「どうやら当たりっぽいな」

本には“禁書庫”と書かれたシールが貼られていた。

「扉もちょうど開いたからラッキーだな」

おっさんが中から出てきてくれたおかげで扉は開いたままだ。

「っーかおっさんってば白目むいちゃってるよ。……あー

あ、ブサイクな顔がさらにブサイクになつてら

「お前がやったんだろ」

まあな。

「ところでヒビキ、その本中身はなんなんだ？」

「中身？」

そういえばなんだろうな？

ちよつと気になる。

適当なページを開いてみた。

……ぱたん！

二秒で閉じた。

「……なにが載つてたんだ？」

なにが載つてたっつーか……あれは……もう……

……。

見たほうが早いと思う。

俺はアスカに本を渡してやった。

アスカは怪訝そうな顔をしながら本を受け取り。

開いて。

見て。

そして壁に投げつけた。

「こ、このジジイツ……！こんなものためにわざわざこんな時間

まで居たのかあ……！！！！」

げしいっ！！

うわ、痛ぞ。

アスカのやつおっさんを思いつきり踏みつけやがった。

あーあ、おっさん背中にくつきり足型ついてるし。

おっさんの持ってた本はポルノ本だった。

……ハード系の。

ものすごかった。

「このおっさんも、……好きだなあ」

ていうか何でこの国はこんな本を禁書庫で保管してるんだ？

「行くぞヒビキ！こんな本、あたしがぜんつぶ燃やしてやる！！！」
アスカはそういわずかすかと扉の向こうへ歩いて行ってしまった。

おいおい！俺をおいて先に行くんじゃない！！

「お、おいアスカ！ちよつと待っててば！！！」

俺は一応おっさんを縛り上げ、猿轡を噛ませると急いでアスカを
追いかけた。

第1話：禁書庫侵入大作戦！（後書き）

第一話は作品内の情報は最低限に絞って書きました。この作品の雰囲気を感じ取ってもらえたら幸いです！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6118v/>

エルデグランデ物語

2011年8月11日03時38分発行